

今と昔の形容詞の頻度：時代によって変わるのか

北原拓武
はじめに

日本語はその語彙の豊富さから変化の激しい言語だと考える。ひとつの文章を取っても単語や品詞の使われる頻度は時代によって異なってくるであろう。これからの日本語を考える上でも品詞の頻度を考えるのは大切になってくるであろう。そこで、特に形容詞、形容動詞において時代の違いによって出現頻度が変わるのかを検証する。

金澤(2008)によると「それまで見られなかった「～的」の新しい表現形を耳にしたり、目にすることが多くなってきている。」(p.196)「平安時代のことばは、今の若者には英語より遠いものとして捉えられる」(p.2)とある。

「～的」という表現は形容動詞に分類され、日本語の変化の激しいということから古代から現代にかけて形容詞、形容動詞の頻度が上がるという仮説を立てた。

方法

平安、江戸、明治の三つの時代の物語文の文字量の多い段落を選出し、品詞に分解する。そこにある形容詞、形容動詞の数を段落の文字数で割った割合を出す。使用した文章は順に、「伊勢物語」の第6章（(1933)池田亀鑑「伊勢物語に就きての研究 上」より）「おくの細道」の第1章((1911)三宅邦吉「新釈奥の細道」より)「こころ」の終章41（(1914)夏目漱石）である。

結果

	伊勢物語第6章	奥の細道 第1章	こころ 終章41
全文字数	483	631	1573
形容詞形容動詞数	10	4	28
頻度	2.070393	0.633914	1.780038

図2 文章の文字数における形容詞、形容動詞の数とその割合
仮説とは異なり現代でも形容詞や形容動詞がの頻度があまり変わっていないことがわかる。

結論：形容詞、形容動詞は時代が違っていていても同じ頻度で使われている。

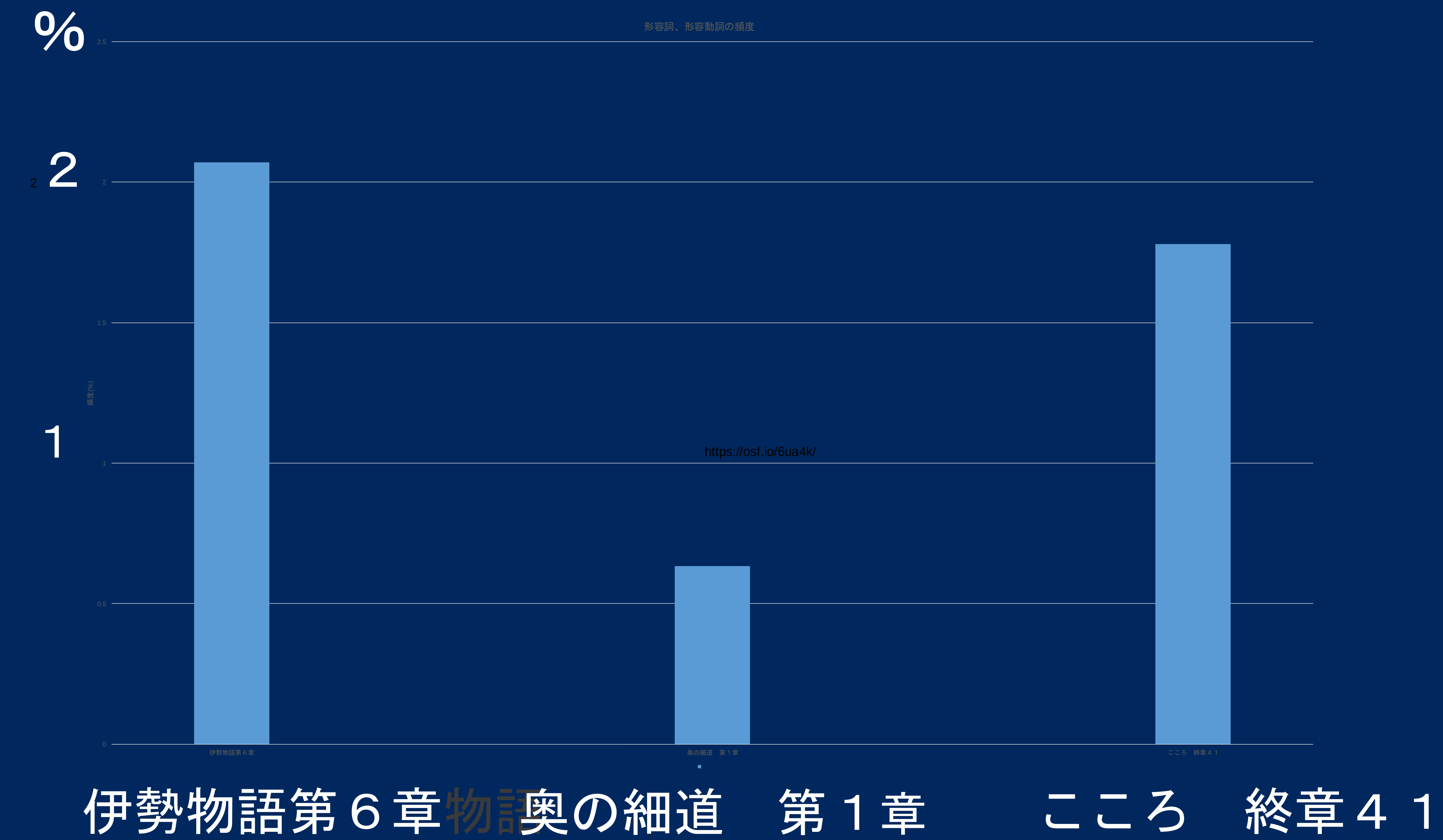


図1 各作品の一段落における形容詞、形容動詞の頻度

考察

「伊勢物語」と「こころ」の形容詞、形容動詞の頻度はほぼ同じという結果になった。一方で、「奥の細道」の頻度は他の作品に比べ頻度が一段低いことがわかった。これは引用した文章が作者の動作状況を多く描写していることに由来する。ほかの江戸時代の物語でも比較する必要があると考えた。

また、「～的」という表現は「伊勢物語」、「奥の細道」では見られなかったが、「こころ」では3つ見られた。金澤の述べたことが写っていることがわかる。

おわりに

仮説に反して形容詞、形容動詞は時代によらず、ある程度同じ頻度で使われていることがわかる。参考にする文字量や物語によって結果が違ってくるのか考えていきたいと思った。

文献

金澤裕之(2008)「留学生の日本語は、未来の日本語 日本語の変化のダイナミズム」、ひつじ書房、[289]

参照

三宅邦吉(1911)「新釈奥の細道」、靄山書店、[61]

夏目漱石(1914)「こころ」、岩波書店、[223]

池田亀鑑(1933)「伊勢物語に就きての研究 上」、大岡山書店、[352]